

<キリスト教>

(1) 起源・歴史

エルサレムに第二神殿が建立されて以降のことで、それ以前は<ユダヤ教>と同じである。紀元前 4 年頃に誕生したイエスの教えを主体とする。この頃のエルサレムは古代ローマ帝国領であり、ヘロデが王となっており、かなり退廃していた。

エルサレムの北、ナザレに住んでいたマリアは大工ヨセフと婚約していたが、天使ガブリエルから“神の子”が誕生することを告げられた。(マリアの処女懐胎。)”神の子”とは、ユダヤの預言者イザヤが預言した“メシア”のことである。これを聞いた心清きヨセフはマリアと別れようとしたが、ヨセフの夢の中にもガブリエルが現れたので納得し、その子の父親となる決心をした。

当時、皇帝アウグストゥスは支配民すべてに人口調査を命じており、その登録のため、2 人はベツレヘムに赴いた。マリアは臨月を迎えていたが、彼らは貧しかったので、泊まれるところはなかった。そこでやむなく、馬小屋に身を寄せた。誕生の時、徴として天に八角形の“ベツレヘムの星”が輝いた。その徴を見た東方の三博士(賢人)が、お生まれになったユダヤ人の王は何处かと、ヘロデを訪ねた。ヘロデは知らなかったので、祭司や律法学者を集めて調べさせ、ベツレヘムであることが解った。三博士は星に導かれて辿り着き、没薬(もつやく)、乳香、黄金を贈り物として捧げた。嬰兒(みどりご)は、インマニエル(神と共に在る者、の意)と名付けられた。

しかし、救世主の誕生を聞いて恐れおののいたヘロデは、ベツレヘムの嬰兒をすべて虐殺するよう命じた。インマニエルは母に抱かれ、エジプトへ逃れて救われた。(モーゼの誕生場面と似ている。)

時が流れ、ヘロデが死ぬと、天使はイスラエルの地に戻るよう告げた。しかし、ヘロデの子らが支配していることを恐れ、ナザレに身を隠した。30 歳ほどになっていたインマニエルは、ユダヤの洗礼者ヨハネからバプテスマ(洗礼、水浴による禊)を受けようとした。しかし、ヨハネは拒絶した。「私こそが、あなたから洗礼を受けるべきである」と。しかし、インマニエルは拒否し、ユダヤ人としてヨハネから洗礼されなければならないとして、洗礼を受けた。

インマニエルは洗礼を受けると、すぐに水から上がった。その時、天がインマニエルに向かって開いた。インマニエルは、神の霊が鳩のように降ってくるのを見た。そして、天から声が響き渡った。「これは私の愛する子、私の心に適う者」洗礼されたあたりから、“イエス”と呼ばれていたようである。

洗礼の後、イエスは荒野へ行き、ある険しい山にて 40 日間“悪魔の誘惑”と戦った。(この頃の領主ヘロデはヘロデ王の第 4 の妻の息子で、ガリラヤとペレアを支配していた。異母兄の妻ヘロデヤと密通し、妻としていた。その養女がオペラで有名なサロメである。しかし、聖書にそのような記載は無い。)

‘神の子なら、この石にパンになるよう命じたらどうだ’

「人はパンのみに生きるものではない」

‘(悪魔はイエスを高く引き上げ、一瞬のうちに世界の全ての国々を見せ、) 目に見えた国の一切の権力と繁栄を与えよう。もし、私を拝むのなら、すべてがお前のものになる’

「私は、この世の唯一の神のみを拝する」

‘(悪魔はイエスをエルサレムの神殿の屋根の端に立たせ、) 神の子なら、ここから飛び降りてみるがいい’

「神を試みてはならない。退け、サタン！記されている言葉はこうだ。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』」

悪魔は去り、天使たちが舞い降りて、イエスに仕えた。

祝福されたイエスは各地を回り、福音を告げ、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい」と、人々に説いた。と同時に、数々の奇蹟を起こした。最初の奇蹟は、カナの婚礼に招かれた時、ワインが無くなったので、瓶の水をワインに変えた。ガリラヤ湖では、嵐を鎮めるために湖上を歩いた。またタブハ村では、2匹の魚と5つのパンを増やして5000人の群集に分け与えた。他にも、イエスは一瞬にして病気の人を治したり、悪霊を退散させたり、またある時は、死者をも蘇らせるという奇蹟を行ったので、多くの人がイエスに従った。イエスは山に登り、見渡す限りの群集を見て、8つの至福の状態を説いた。(山上の垂訓。モーゼの十戒も山で授かった。)

- ・心の貧しい人々は幸いである。天国はその人たちのものである。
- ・悲しむ人々は幸いである。その人たちは慰められる。
- ・柔和な人々は幸いである。その人たちは地を受け継ぐ。
- ・義に飢え渴く人々は幸いである。その人たちは満たされる。
- ・憐れみ深い人々は幸いである。その人たちは憐れみを受ける。
- ・心の清い人々は幸いである。その人たちは神を見る。
- ・平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる。
- ・義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである。

預言者がエルサレム以外で死ぬことはあり得ないので、ファリサイ人、サドカイ人、律法学者から非難されることを承知の上で、エルサレム入城を決意した。イエスは弟子たちに、エルサレムに入城したら多くの非難を受け、殺されるという受難を告げ始めた。ただし、殺されてから3日後に復活する、ということも。

イエスはペトロ、ヤコブ、ヨハネの3人を連れて高い山に登った。すると、イエスが空中に浮き、顔が太陽のように輝き、服は光のように白くなった。そして、預言者モーゼとエリヤが現れて、イエスと語り合っていた。更に、光り輝く雲が湧き上がり、その中から声が聞こえた。「イエスは我が愛する子。すべてのことは彼に聞け」弟子たちは恐れ、ひれ伏したが、イエスは彼らに言った。「恐れることはない。人の子が死者の中から復活するまで、今見たことは、誰にも話してはならない」

イエスはロバに横乗りになって、エルサレムに入城した。神殿に着くと、その有様を見て激怒した。供物を売り買いしている人を追い出し、両替商や鳩を売る台をひっくり返した。聖なる場所をあざとい商売の場にしていたからである。「聖書には、“私の家はすべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである”と書いてあるではないか。ところが、お前たちはここを強盗の巢窟にしてしまった。カナン人は呪われよ！」

祭司長や律法学者、ファリサイ人、サドカイ人はこれを聞いて、如何にしてイエスを殺すべきか、ということを企てた。多くの民衆が、その教えに心を動かされ始めているのを恐れたからである。彼らはイエスを試し、矛盾した答えをしたり、答えに窮したりすれば、罪として陥れようとした。

‘あなたは、まだ 50 歳にもならないのに、アブラハムを見たのか?’

「はっきり言うておく。アブラハムが生まれる前から“私は在りて在る者”」すると、彼らは石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。また、イエスは自分が来た目的を次のように述べた。

「私が来たのは、律法や預言者を廃止するためだと思ってはならない。廃止するため、ではなく、完成するため、である」

また、律法学者とファリサイ人に対して言った。

「律法学者とファリサイ派の人々、あなたたちは偽善者である。人々の前で天国の門を閉ざすからだ。自分が入らないばかりか、入ろうとする人をも入れさせない」

律法学者とファリサイ人は言った。

‘律法の中で、どの掟が最も重要か?’

「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。これが、最も重要な第 1 の掟である。そして、隣人を自分のように愛しなさい。これが、第 2 の掟である。すべての律法と預言者は、この 2 つの掟に基づいている」

イエスの完璧な答えに、彼らは打ちのめされた。今度はイエスが問うた。

「メシアをどう思うか。そして、誰の子と思うか?’

‘ダビデの子です’

「ならば、ダビデは霊の力を受けた時、メシアを主と呼んでいるのか。ダビデがメシアを主と呼んでいるのなら、どうしてダビデの子なのか?’

誰も言い返すことができなかった。これ以来、もはや問答で試す者は居なくなった。

イエスは“最後の審判”についても語り始めた。「羊飼いが羊と山羊を分けるように、羊を右に、山羊を左に置く。その時、栄光の座について王となった人は、右手側に居る人たちに言う。『祝福された人たち、天国を受け継ぎなさい。』左手側に居る人たちにはこう言う。『呪われた者ども、悪魔とその手下のために用意してある永遠の炎の中に落ちるが良い。お前たちの不正な行いは許されない。』こうして、正しい行いをする人は永遠の命にあずかり、至福の千年王国を築くのである」

イエスは、このような教えを昼の間に神殿で告げ、夜はオリーブ山で過ごした。

（旧約）聖書の預言成就のため、イエスは自らが磔刑に処せられ、その後、復活しなければならない。過ぎ越しの祭りの前に催された有名な“最後の晚餐”で、イエスは12人の使徒と共に食事をした。食事が開始されたとき、イエスは言った。「この中に、私を裏切ろうとしている者が居る」弟子たちが誰のことか尋ねると、「私と一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が裏切る。人の子は、聖書に書いてある通りに去って行く」

イエスはパン（種無しパン＝発酵種＝酵母の入っていないパン）を取り、賛美の祈りを唱え、裂いて、弟子たちに分け与えて言った。「取りなさい。これは私の体である」また、ワインの入った杯を取り、感謝の祈りを唱え、弟子たちに渡し、回し飲みをした。「これは、多くの人たちのために流される私の血、契約の血である。神の国で新たに飲むまで、葡萄の実から作ったものは、もう決して飲まない」一同は賛美歌を歌い、オリーブ山へ行った。

イエスは弟子たちに言った。「今夜、あなた方は皆、私から逃げるだろう」とすると、ペトロが言った。「皆が逃げて、私は決して逃げません」

「あなたは今夜、鶏が鳴く前に、3度、私のことを知らないと言うだろう」

「一緒に死ななければならなくても、決して知らないとは言いません」

一行は、ゲッセマネ（油絞り、の意）という所に来た。イエスは言った。「私が祈っている間、ここに座っていなさい」イエスは、ペテロとヤコブとヨハネの3人を連れて、歩み始めた。更に進むと、地に伏して祈った。「父よ、できることなら、この苦しみの杯を私から過ぎ去らせて下さい。しかし、私の思いからではなく、御心のままに」弟子たちのところへ戻ると、皆、眠っていた。「このわずかな時でも、共に目を覚ましていてくれなかったのか。誘惑に陥らないよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い」イエスは、もう一度向こうへ行って祈った。戻ってみると、弟子たちは眠っていた。更に、もう一度向こうへ行って祈った。戻ってみると、この3度目も弟子たちは眠っていた。「あなたたちはまだ眠っている。しかし、時は近づいた。人の子は、罪人の手に引き渡される。立て、行こう！見よ、私を裏切る者が来た」ユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者ら、群衆も剣や棒を持ってきた。ユダは、私が口づけする者がその人だ、と決めておき、イエスに近づいてキスした。先生ー。イエスは捕らえられた。

この時、イエスの弟子の1人が剣を抜き、祭司の手下に切りかかって、片耳を削ぎ落とした。しかし、イエスは言った。「鞘に収めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。私が父にお願いすれば、すぐにでも12軍団以上の天使を送ってくれるだろう。しかし、それでは預言が成就しない」イエスは、祭司長らに向かって言った。「お前たちは、強盗にでも向かうかのように、私を捕らえに来たのか。私が毎日、神殿で教えていた時には、捕らえなかったのに。すべてのことが、このように起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである」弟子たちは皆、イエスが言われた通り、イエスを見捨てて逃げてしまった。

イエスは大祭司の居る最高法院（サンヘドリン）へ連れて行かれた。大祭司はイエスを殺すために証言を求めたが、彼らの証言は食い違っていた。大祭司

は、イエスに尋ねた。「不利な証言をどう思うか。お前は、メシアなのか」イエスは答えた。「それは、あなたが言ったことである。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれてくるのを見る」大祭司は自分の服を引き裂きながら、声高に言った。「神を冒瀆する言葉を聞いた。さあ、どうするべきだ」一同は、死刑にすべきだ、と決議した。

この時、ペトロも同じ建物の庭に居た。すると、ある女が、この人も一緒に居た、と言った。しかし、ペトロは否定した。また別の人が、お前もあの連中の仲間だ、と言った。しかし、ペトロは否定した。1時間ほどすると、また別の人が、確かにこの人も一緒だった、と言った。ペトロが、「あなたの言うことはわからない…」と言い終わらないうちに、鶏が鳴いた。ペトロは、イエスの言葉を思い出した。そして、外に出て、激しく泣いた。

夜が明けると、イエスをローマ帝国総督ピラトに引き渡した。「お前がユダヤ人の王なのか」「それは、あなたが言っていることです」ピラトは、イエスに何の罪も見出せなかった。当時、祭りの時には、囚人を1人だけ解放する慣わしがあったことを思い出し、ピラトは皆に言った。「この男は死刑になるようなことはしていない。祭りの習慣で、釈放したらどうだ。それとも、暴動と殺人で逮捕されている囚人バラバの方を釈放した方が良いとでも言うのか」すべての人が、バラバを！と叫んだ。ピラトは言った。

「では、イエスはどうしたら良いのか？」

‘十字架につけろ！’

「彼が、どんな悪事を働いたのだ？」

‘十字架につけろ！！’

暴動が起こりそうな気配を察知し、ピラトは水を持ってこさせ、手を洗って言った。

「この人の血について、私に責任は無い」

群衆は言った。

‘その血の責任は、我々と子孫に掛かっても良い！’

ピラトはバラバを釈放し、イエスを十字架に掛けるために引き渡した。

兵士たちは、イエスの着ているものを剥ぎ取り、王の象徴である（赤）紫の外套を着せ、茨の冠をかぶせて鞭打ち、唾を吐きかけ、棒で頭を殴り続けた。このように辱めた後、元の服を着せ、イエスに十字架を背負わせ、処刑場“ゴルゴタの丘（シャレコウベの丘、の意）”まで引かせた。十字架の上に掲げられた罪状板には、“ナザレのイエス、ユダヤの王”と3言語（ギリシャ語、ラテン語、アラム語）で書かれていた。他に、2人の強盗も十字架に掛けられた。そこには、群衆に混じって、大勢の婦人たちが遠くから見守っていた。この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼベタイの子らの母が居た。

十字架に掛けられたのは午前9時頃だったが、12時になると真っ暗になり、それが15時まで続いた。その時、イエスは叫び、絶命した。

「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ（我が神、我が神、何故、私を見捨てたので

すか) !」

すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。また、地が裂けて死者が蘇った。イエスの方を向いて立っていた隊長が叫んだ。

「この人は、本当に神の子だったのだ」

また、イエスを売ったユダは、イエスに死刑判決が下ったことを後悔し、報酬として貰った銀貨 30 枚を返そうとした。しかし、それはお前の問題だ、と拒絶され、銀貨を神殿に投げ込んで去り、首を吊って自殺した。祭司長たちは、血の代金だから神殿の収入にはできない、として、畑（血の畑）を買い、外国人の墓地とした。

この処刑の日は金曜日で、翌日はユダヤの安息日であった。また、ゴルゴタの丘は神殿のすぐそばにあったので、イエスの遺体は即刻降ろされた。夕方になると、アリマタヤ出身で密かにイエスの弟子であったヨセフという金持ちが、ピラトに遺体を渡してくれるよう申し出た。ヨセフは遺体を綺麗な亜麻布で包み、岩に掘った横穴に納め、その入り口に大きな石を転がして立ち去った。マグダラのマリアとイエスの母マリアはそこに残った。

安息日が終わると、2 人のマリアはイエスの遺体に油を塗るために香料を買った。週の始めの日（日曜）の朝早く、太陽が昇るとすぐに墓に行った。ところが、墓を塞いでいた大きな石が、どけられていた。中に入ってみると、白く長い衣を着た 2 人の天使が見えた。1 人は頭のほうに、もう 1 人は足の方に座っていた。その天使の 1 人が言った。「あの方は復活されて、ここにはおられない。行って、弟子たちとペトロに告げなさい。あの方は、先にガリラヤに行かれる。かねて言われていた通り、そこでお目に掛かれる、と」数人の番兵がこのことを祭司長たちに報告した。祭司長たちは、番兵に多額の金を与えて言った。「イエスの弟子たちが夜中にやって来て、お前たちが寝ている間に遺体を盗んで行ったことにしなさい」番兵たちは言われた通りにした。この話は、今日に至るまで、ユダヤ人の間に広まっている。

預言通り復活したイエスは、まずマグダラのマリアの前に姿を現した。イエスが復活したことをマリアたちは使徒に伝えたが、誰も信じなかった。その後、11 人の使徒が食事をしている時、イエスが現れ、その不信仰を咎めた。彼らは亡霊を見ていると思った。イエスは手と足を見せた。更に、食べ物（焼いた魚）を持ってこさせ、目の前で食べて見せた。イエスは言った。「私について、モーゼの律法と預言者の書と詩篇に書かれていることは、すべて実現する。私は、父に約束されたものをあなた方に送る。高いところからの力に覆われるまで、都に留まっていなさい」それからイエスは、自分が復活したことを使徒たちに示し、40 日に亘って彼らの前に現れ、神の国について話した。その最後の日、イエスは 11 人の使徒をベタニアのオリーブ山に連れて行き、手を上げて祝福した。そして、祝福しながら彼らを離れ、昇天した。（肉体を持ったまま白く輝き、天空に消えていった。）10 日後、一同が集まっていると、突然天から聖霊の炎が

現れ、一人一人の上に降り注いだ。すると、一同は聖霊に満たされた。

このような復活の奇蹟を目の当たりにし、使徒たちはイエスが受けた苦難と同じぐらいの苦難に満ちた伝道の道を歩み始めた。ローマ帝国の激しい迫害の後、正式に国教と認められ、世界中に広がっていったのである。

イエスが伝道を行ったのは、3年間という極めて短い期間である。しかし、2000年を経た今でも、そこに凝縮された教えの数々に、我々は心を揺るがさずにはいられない。最後に昇天した場所には、ラザロ（昇天）教会が建立され、内部にはイエス昇天時の足跡が残る岩が納められている。

(2) 新約聖書

イエスの教えを収録し、イエスを神格化したのは新約聖書である。ユダヤ教やイスラム教ではイエスを偉大な預言者の1人とみなすが、神格化することは認めていない。

キリスト教は、人類に遍在する「原罪」を、神の子であるイエスが犠牲となることにより贖うことができるようになった、と解釈する。それ故、信じる者に対しては、万人の救済となる。また、ユダヤ教のような割礼は必要としないことも、世界中に広がった要因の1つである。

旧約がヘブライ語で記述されているのに対し、新約聖書はコイネー・ギリシャ語（当時、エルサレム辺りで使われていたギリシャ語）で記述されている。その構成は、主に次のようになる。

- ・福音書：マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ。
イエス・キリスト伝と言える。誕生、受難、復活に関して。
- ・使徒言行録：パウロの伝道の旅。ルカ書の続編。
- ・手紙：21文書中13文書がパウロの著作。ローマ信徒への手紙など。
- ・ヨハネの黙示録：終末預言とイエスの再臨預言。

様々な教団が誕生したが、キリスト＝救世主の人性と神性をどう規定するかということで、対立していた。しかし、325年に小アジアのニカイアで開かれたニカイア（ニケーア）公会議で、三位一体論が採択された。三位一体とは、神は1つであるが、御父、御子、聖霊という3つのペルソナ（位格）を持つというものである。しかしながら、イエスの死後300年も経過してからようやく採択されたところを見ると、イエスが生きていた当時のイエス自身の教えはそのようなものではなかった、と推測される。

(3) 解説

・ユダヤ人の名前

これまで見てきたように、この頃のユダヤの人名は姓が無いので、～出身（出身族、出身地）の誰某、というように名乗ることが多かった。ヨハネとかユダなどは何人もいるので、イエスを裏切ったユダは“イスカリオテのユダ”と言われているが、実は“イハリオテのユダ”という説もある。また、ユダは裏切

ったのではなく、イエスを売り渡すことも預言されていることなので、イエスの言葉に従って売った、という説もある。

・イエスの容姿

イエスは純粋なスファラディ系ユダヤ人なので、絵画にあるような金髪・碧眼ではない。西洋人が自分たちの「神」としたかったので、自分たちと同じような容姿とした。

・東方の三博士（賢人）

学説ではゾロアスター教や古代ペルシャのミトラス教の神官と見なされているが、そうではない。異教の神官が、何故に、ユダヤの救世主を拝みに来たのか。

イスラエルは北朝と南朝に分裂したが、北朝の系列は何故かエルサレムには戻らず、歴史から消えた。聖書には、失われた支族は東で膨大な数になっている、とある。イスラエルは分裂したが、レビ族は十二支族に数えず、祭司のためにどちらにもレビ族は居た。故に、東方の三博士とは、失われた十支族の中のレビ族、祭司であると推測される。

・律法学者、ファリサイ人（ファリサイ派）、サドカイ人（サドカイ派）

律法学者とは、モーゼの律法を研究・解釈する学者であるが、イエスの頃にはかなり権威主義化していた。特に、バビロン捕囚がきっかけとなったタルムードに依るところが大きい。

サドカイ派はファリサイ派と同様、イエスに反対したが、イエスの件以外ではファリサイ派と宗教的にも政治的にも主導権争いがあった。しかし、イエスの登場は、対立的であったファリサイ派、サドカイ派、ヘロデ党などを、一致団結してイエス排斥に当たらせることとなった。

その特徴は、ファリサイ派が死後の復活を信じたが、サドカイ派は否定した。ファリサイ派が神の御使いである天使を信じたが、サドカイ派は否定した。ファリサイ派は民間の律法研究に熱心な人々から起こったが、サドカイ派はその名（エルサレム神殿の最初の大祭司ツァドクに由来する）が示すように、祭司階級によって構成された。

よって、ファリサイ派が中流階級かそれ以下の民衆を基盤とするのに対し、サドカイ派は特権階級と言える。この違いにより、独立戦争の失敗によってエルサレム神殿が破壊された後もファリサイ派は生き残ったが、サドカイ派は潰れた。

・聖体拝領、聖油

最後の晩餐の際、イエスはパン（種無しパン）を裂いて弟子たちに分け与え、自分の体である、と言った。また、ワインの入った杯を取り、自分の血、契約の血である、と言った。

聖体拝領はこれに因み、パンはキリストの肉、ワインはキリストの血として行われる秘蹟である。（主にカトリック。）

聖油はオリーブオイルであり、臨終を迎えた信者に最後の恵みを与えるものである。(ユダヤ教では、古代イスラエルの王が王位を継ぐとき、主に捧げた聖油を額に塗り、聖別が行われた。)

・聖十字架

イエスが処せられた十字架を「聖十字架」と言う。これは、絵画でよく描かれている十字型のものではなく、上が突き出ていないT字型十字架である。

また、担いで歩いたのは十字架の横木（パティブルム）だけである。当時、縦木（スティプス）は刑場に立てられたままで、使い回した。横木は約 1.6m、縦木は約 4.8m である。これが一体となったものを担ぐのは無理である。

刑場に到着すると、横木に両腕の“デストの空間”と呼ばれる尺骨（手首の腕側にある 2 本の骨）の間、もしくは手首と尺骨の間に五寸釘を打って固定した。掌では体重で裂けてしまうからである。それから滑車で吊り上げ、縦木の上に固定したのである。そして、足の甲を合わせて、縦木に五寸釘 1 本で打ちつけた。計 3 ヶ所を固定したのである。

イエスの場合は、更に横木の上に罪状板が掲げられ、辱められた。これを遠くから見ると、まさに、よくある十字架の形である。十字架は現在のキリスト教に於ける象徴であり、偶像崇拜には当たらない。

イエスが処刑されたゴルゴタの丘には、現在、聖墳墓教会が建立されている。

・神（主）の右手側

イエスが“最後の審判”について語った時、羊は栄光の王の右手側に、山羊は左手側に置かれ、右手側の人たちは祝福されて天国へ、左手側の人たちは呪われて地獄へ堕ちる、とある。羊とは“神の子羊”のことで、神への生け贄なのである。山羊はサタンの象徴である。

また、囚われの身となった時、「あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれてくるのを見る」とイエスは言った。

また、後の聖人、聖ステファノはファリサイ人に捕らえられ、群衆の目前で石打の刑に処された。(当時から中東での処刑方法は石打が主体で、磔刑はローマ帝国のものである。) その時、天が開いて神界が見え、メシアが天の父の右手側に立っているのを見た。

よって、神や主に対して右手側が人間に関わる救世主なのである。

・マグダラのマリア

マグダラのマリアは一般的に娼婦だったと言われているが、聖書にはそのような記述は無い。そして、マグダラのマリアはイエスにとって最重要人物なのである。聖書を見直すと、

“この婦人たちは、ガリラヤからイエスに従って来て世話をしていた人々である。マグダラのマリア、ヤコブとヨセフの母マリア、ゼペタイの子らの母が居た”

と、筆頭に挙げられている。また、復活したイエスは 11 人の使徒（ユダは自殺したため 11 人）の誰でもなく、まずマグダラのマリアの前に姿を現した。

最近、イエスはマグダラのマリアと結婚して子をもうけた、という説が脚光を浴びている。特に新約聖書は、イエスの昇天後に弟子によって書かれたものであり、布教のため、権力者の都合の良いように書き換えられた部分もある。マグダラのマリアを娼婦としておけば、誰もイエスが結婚したなどと、思いもしないだろう。

- ・歴史に於けるユダヤ人迫害

ユダヤ人の迫害は、ユダヤ教による“選民思想”も大きな原因の 1 つであるが、最大のものは、ピラトがイエスを処刑するかどうかユダヤの群衆に尋ねた時、‘その血の責任は、我々と子孫に掛かってよい！’と言ったことにある。そのため、“子孫”であるユダヤ人（十把一絡げ）が、何か事ある毎に、世界中で忌み嫌われるのである。ユダヤ人は、神の子イエス（イエス自身は「人の子」と言っている）、救世主イエスを処刑した呪われた民族である、という思想である。

(4) 現在の分類

- ・カトリック

一応、最も正統派であると言われており、各宗派の大元である。だが、歴史的には、カトリックは教会の権威強化に翻弄した。イエスを「神の子」とし、“処女懐胎”を正当化した。また、十字軍による聖遺物探索（聖地奪回は名目）、異端審問による魔女狩り、など。つまり、偽りの仮面なのである。

その証拠に、ヴァチカン前の広場にはオベリスクがある。これは、古代エジプト由来で、悪名高きカリギュラ帝がエジプトから持ってきたものである。上から見た時、丸く囲む壁が女性器、その中にそそり立つオベリスクが男性器を象徴している。（このオベリスクはアメリカのワシントンにもある。）カリギュラの頃は、性器崇拝が行われていた。ヒンズー教では現在でもそうである。ヨニ（女性器）にリング（男性器）がそそり立っているものを御神体とする。

また、教会には告解の場というのがある。これは、信者が神父に罪を告白する密室である。昔、かなりの女性がこの密室で犯されたい。これは、教会内がすべて男性である事が原因である。教会の組織に入るために男性器が必要なのに、入ったとたん、不要となる。本当の神は、不要なものなど創らない。（仏教なども同じである。）

よって、敬虔な信者には申し訳ないが、カトリックは“偽りの仮面”である。（これは、他の宗教にも言えること。）イルミナティの手に落ちている。

- ・プロテスタント

プロテスタントはルターの宗教改革により発生した宗派。“聖書に還れ”を基本とする。権威主義化したカトリックを批判した。主にドイツ。

- ・正教

ギリシャ正教とロシア正教。11 世紀にカトリックから分離した。ギリシャ語が基本であり、修道が基礎である。イコンを掲げ、崇拝の対象とする。イコン

とは、イエスや聖母、聖人の絵（映＝イコン）のことであり、象徴であるため、偶像崇拜には当たらない。

- ・英国国教会

カトリックから独立して独自の道を歩む。カトリックの教義に縛られず、正々堂々と離婚ができ、悪事を働ける。

(5) 聖遺物

イエスに関連する遺物。十字軍がエルサレムに遠征したのも、これらの遺物を手に入れて、教会としての権威を絶対的にするため。いろいろあるが、代表的なものは以下のものがある。

- ・聖十字架：言わずと知れた、磔刑で使用された十字架。ヨーロッパの教会のあちこちにある。全部集めると、十字架が2本分とか。
- ・聖骸布：イエスを覆った亜麻布。トリノのジョヴァンニ大聖堂にある。
- ・聖槍：イエスが絶命したかどうかを確認するため、イエスの脇腹に刺した槍。血と共に体液が流れ出たので、死んだと判断された。槍を刺したのはロンギヌスという人物なので、“ロンギヌスの槍”とも言われる。彼は白内障であったが、イエスの血と体液を浴びて治癒した。それ以降、キリスト教徒となった。これも、あちこちに存在する。
- ・聖杯：最後の晩餐でワインを回し飲みした杯。そして、磔刑でイエスの血と体液を受けた。保持すると世界の覇者になれるという伝説がある。そのため、「聖杯騎士団」などが生まれた。血眼になって探しているのは、イルミナティを中心とした三百人委員会である。ただし、聖書に“イエスの血と体液を受けた”という記述は無い。

(6) 聖人信仰

聖人信仰はローマ帝国によるキリスト教徒迫害に始まる。当時、ローマ帝国は多神教であり、エジプトやペルシャの神などを崇拝していた。多くの民衆が新興宗教のキリスト教に惹かれ始めると、皇帝の権威が危うくなる。そのため、キリスト教徒は激しい拷問の上、殺害された。円形闘技場でのライオンとの格闘などは、その一例である。

しかし、キリスト教徒はそれにもめげなかった。何故なら、“山上の垂訓”でイエスが「義のために迫害される人々は幸いである。天の国はその人たちのものである」と言ったからである。殉教者は天国に於けるイエスの偉大な友として聖人と見なされ、民衆は彼らに代願や保護を求めるようになり、聖人信仰が盛んになった。

(7) 悪魔（サタン、ルシファー）

現在、悪魔やサタン、魔王ルシファーと言われる存在のイメージは、キリスト教での悪魔のイメージである。

悪魔とは、一般的に魔王ルシファーのことである。天から落ちた明けの明星

(金星)とも言われる。ルシファーは元々、最高位の天使ルシフェルであった。エルは単数の神で、エロヒムが複数形である。天使の名が～エルなのは、そのためである。

最高位の天使は、自分も神として振る舞えると思った。そこで、天使を惑わせて全天使の 1/3 を味方につけ、絶対神に反逆した。しかし、神には勝てなかった。

「サタンが稲妻のように天から落ちるのを見た」(イザヤ書)

「天で戦いが起こった。ミカエルとその使いたちが、竜に戦いを挑んだ。竜とその使いたちは応戦したが、勝てなかった。そして、彼らには天での居場所がなくなった。この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わすものは、地上に投げ落とされた」(ヨハネの黙示録)

地に落とされた天使なので“墮天使”と言う。サタンは地底に封印されたが、その期間は千年。イエスの死から千年後、復活して現在はサタンが支配している。(その通りの世の中である。)しかし、その期間も千年。となると、そろそろメシアが再臨し、最後の審判を下す時も近いと思われる。そのため、20 世紀末に向けて、カルト集団が続発した。モルモン教、ものみの塔(エホバの証人)、統一教会などがその例である。

最後の審判を告げるラッパが吹き鳴らされ、大地が裂け、死者が地上から這い出し、肉体が徐々に蘇り、審判を受ける。

(8) 数秘術

キリスト教でも、いろいろ意味ありげな数字がたくさん出てくるが、やはり意味がある。

・3：東方の三博士、ペトロ、ヤコブ、ヨハネの 3 人を連れて高い山に登った、ペトロは 3 度知らないと言う、3 日後に復活、など。「生命の樹」の 3 本の柱を表す。

・40：40 日間の悪魔の誘惑、40 日後に昇天。ノアの箱舟の 40 日間の放浪。モーゼは十戒を授かる時に 40 日間シナイ山に籠もった。

・8：ベツレヘムの星は八角形。8 つの山上の垂訓。8 はキリスト(救世主)の象徴である。元々は、人類初の文明シュメールの大神アヌの象徴。古代ローマ帝国の貨幣にもあるが、それはイエスの象徴ではない。8 紋を重ね合わせると 16 紋となる。

・12：12 人の使徒。

・13：使徒にイエスを合わせると 13 人で、13 は完全数となる。後に、秘密結社などによってイエスは 13 日の金曜日に処刑された、ということにされ、不吉な数字へと変化した。

・7：ここでは述べなかったが、最後の審判は7段階ある。特に、最後の災いは7人の天使が、神の怒りを盛った7つの鉢をぶちまけて起こされる。7は神の数字と見なされている。創世記に於いて、天地創造は7日で完了し、人類初の殺人者カインを殺そうとする者には主から7倍の復讐が成された。

このように、数字もまた、ユダヤ教のカッパーラの1つである。カッパーラは呪術でもある。故に、人類の贖罪のために磔となったイエスは“白魔術の生け贄”という解釈が可能である。黒魔術だけが、生け贄が必要というわけではない。白魔術では人間の生け贄は必要ではなく、獣や人形などで代用されるが、人類の贖罪は大きいため、イエスが聖なる犠牲となった。

また、数字ではないが、T字型の十字架に磔となったイエスの原型もある。それは、「モーゼの旗竿」に掲げられた「青銅の蛇」である。思い出して欲しい。旗竿はT字型十字架で、毒蛇に咬まれても青銅の蛇を仰いだ者は助かった。このように、救世主を象徴する出来事や数字などを「予型（よけい）」と言う。モーゼの誕生場面も、イエスの誕生場面の予型である。

(9) 原始キリスト教

イエスが存命中の初期のキリスト教を原始キリスト教と言う。これは、よくネストリウス派と混同されたりしているが、それは間違いである。(ネストリウス派は中国へ伝わり景教となった。空海は当時の聖書を日本に持ち帰り、高野山の某所に隠されているらしい。)

イエスの昇天後、原始キリスト教はアンティオキア教団とエルサレム教団に分裂した。アンティオキア教団は、当時、公用語として使われていたギリシャ語を用い、異邦人に対して広く伝道することを目的とした。エルサレム教団はアラム語を用い、イエスの教えを頑なに守り、ユダヤ人のみに対して伝道を行った。

厳格なエルサレム教団と馴染めなくなっていくアンティオキア教団は、ついにエルサレム教団と袂を分かった。そして、迫害に耐えながらも、世界中に伝道して行ったのである。エルサレム教団は、いつしか歴史から忘れ去られることとなった。

実は、原始キリスト教こそが、本来のキリスト教である。イエスは、ユダヤ人のみに対して伝道した。そして、イエスの母マリアもイエスと共にエルサレムの神殿で唯一の神に祈っていたのである。“悪魔の誘惑”の際にも、「私は、この世の唯一の神のみを拝する」と言っている。よって、カトリックの聖母信仰は偽りである。では、その教えとは何か。

【御父：エロヒム、御子：イエス＝ヤハウエ、聖霊：ルーハ】

であり、これら三神で唯一絶対神を表す、という、三位一体とでも言うべきものである。(モルモン教も三位一体であるが、三神で唯一絶対神を表すという考えは無い。それに、モルモン教も一夫多妻などを認めるカルトの1つである。)

その当時のユダヤ教では、御父はヤハウエであり、御子はイエスかどうか解らなかった。仮に、イエスが御子だとしても、彼らの神＝ヤハウエを冒瀆することにはならない。しかし、イエスは“神を冒瀆した”として処刑されたのである。それはつまり、ヤハウエ＝イエスという図式を明らかにしたからに他ならない。イエスはエルサレムの神殿で、「はっきり言うておく。アブラハムが生まれる前から“私は在りて在る者”」と言っている。ユダヤ教で“私は在りて在る者”と言った存在が過去に居る。

「私は“在りて在る者”。イスラエルの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神、お前たちの“主”である」

この“主”とはヤハウエのことであるから、ヤハウエ＝イエスなのである。また、ヤハウエとイエスが同一であるというもう 1 つの重要な証拠は「契約の箱アーク」である。主はアークの「贖いの座」に降臨した。贖いとは、贖罪のことである。ここに降臨したということは、“人類の罪を贖う”ことを意味している。それを、身をもって示したのは、イエスである。

これで、イエス＝ヤハウエとなるわけであるから、神を冒瀆した、ということになるのである。しかし、それではユダヤ人が絶対神であると信じている御父が存在しなくなる。

御父は、イエスの変容の場面では、「イエスは我が愛する子。すべてのことは彼に聞け」と言っているし、ゲッセマネの祈りでイエスは、「父よ、できることなら、この苦しみの杯を私から過ぎ去らせて下さい。しかし、私の思いからではなく、御心のままに」と言っている。また、十字架上で絶命の間に、イエスは「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ！」と言っていることから、イエスは「御父」ではなく、あくまでも「御子」なのである。

先ほどの“主”の言葉は、イエスが誕生する以前のものであるから、

【ヤハウエはイエスが誕生する以前の霊体、イエスは誕生した肉体】

というのがカッパーラの解釈となる。そして、御父とは、神の他の表現であるエロヒム（複数形！）である。これこそが、いつしか忘れ去られてしまった、ユダヤ教の奥義なのである。バビロン捕囚などで、本来の教えよりも過激になってしまったタルムード。そして、権力者による背教で隠されてしまったユダヤ教の奥義なのである。それを裏付けるのが、次の言葉である。「私が来たのは、律法や預言者を廃止するためだと思ってはならない。廃止するため、ではなく、完成するため、である」故に、イエスは自分の教えの伝道をユダヤ人に限定したのである。

つまり、イエスの教えとは、

“御父：エロヒム、御子：イエス＝ヤハウエ、聖霊：ルーハの三神で唯一絶対神を表す”

ということである。そして、これは「生命の樹」に相当する。

【峻巖の柱：聖霊、均衡の柱：御父、慈悲の柱：御子】

しかし、思い出し欲しい。これでは、向かって右側＝御父から見て左手側が「慈悲の柱」となる。救世主は“右手側”だったはずである。が、もう 1 つ思い出すべきはアダム・カドモンで、これが後ろ向きの人間の姿である、ということ。つまり、「生命の樹」の向かって右側は、実は後ろ向きであるから、「鏡写し＝合わせ鏡」で御父の右手側が「慈悲の柱」となる。つまり、イエスはカッパーラを扱う際の「合わせ鏡の奥義」も明らかにしたのである。これで、「生命の樹」に絡まる蛇は、イエスを表していることも理解できよう。だから、イエスは「蛇に変身したアロンの杖」や「モーゼの旗竿の青銅の蛇」として予型されていたのである。

これからすると、イエスが掛けられた十字架は「生命の樹」そのものとなる。聖書にも、人々はイエスを木に掛けて殺した、とある。つまり、「生命の樹」の奥義を明らかにするため、イエスは自ら十字架に掛かったとも言える。「生命の樹」の奥義とは「合わせ鏡」であり、且つ創世記にあったように“永遠の生”であり、イエスが“白魔術の生け贄”となることによって人類の贖罪が許され、至福の千年王国で暮らすことである。（カッパーラとは、ユダヤ神秘主義であることを思い出して欲しい。）

さて、ほとんど忘れ去られ、教義が誤解されてしまった原始キリスト教。本当に、忘れ去られたのか？

イエスが存命していた頃、すでに北朝イスラエルは滅亡して十支族はどこかへ消えてしまい、エルサレムの神殿は、バビロン捕囚後の南朝ユダ王国の末裔であった。そして、神殿には「十戒石板の入ったアーク」はあったものの、「マナの壺」と「アロンの杖」は無くなっていた。十支族が持ち出していたのである。しかも、預言でこの神殿も破壊されることが解っていたので、異教徒の手に渡る前に、祭司（レビ）一族は密かにアークを持ち出していた。（レビ族は祭祀を扱う特別な支族であるから、北朝と南朝に分裂した際も、両方にレビ族は分かれた。）

イエス・キリストをヘブライ語ではヨシュア・メシアッハ、アラム語ではイシュ・マシャ、メソポタミア東部やインドではイズ・マシと言う。イズ・マシ？どこかで聞いたことがある。そう、京都の太秦である。「ウズマサ」はヘブライ語で「ウズ＝光」、「マサ＝賜」という意味もある。

また、種なしパンを「マッツォ」と言い、聖体拝領で使う特別なパンも種なしパンである。マツオ？そう言えば、「秦氏」の総本山は京都の「松尾大社」である。松尾大社は酒の神でもある。マッツォと酒。まさに、聖体拝領を連想させる。ちなみに、マッツォはロシア語では「モチ」と言う。

古代ローマ帝国の時代、中国ではローマ帝国のことを「大秦」と書いた。この頃のエルサレムは、ローマ帝国領。「大秦」と「太秦」は極めて類似しているし、同じ字を採って「秦氏」？

秦氏と言え、京都御所は、聖徳太子のブレーンであった秦河勝の邸宅跡で

ある。何故、天照大神の子孫が秦氏の邸宅跡に住んでいたのか？それに、聖徳太子は厩戸皇子（うまやどのおうじ）と呼ばれ、馬小屋で生まれたとされているし、何故か、大工の神様でもある。イエスみたいだ。八角形の夢殿もあるし。

天皇陛下をはじめとした貴族が着る服で、最も高貴な色は紫。イエスが鞭打たれていた時も、（赤）紫の外套を着せられていた。

実は、南朝ユダ王国が滅びる前に、原始キリスト教徒は祭司一族と共に、失われた十支族の後を追ってシルクロードを東征したのである。アークとイエスに関する物を持ち出して！

中東から中国西域にかけての広い地域は、遊牧民が多い。遊牧民は宗教に関して寛容である。また、ヘブライの民は、元々遊牧民であった。彼らはそのような遊牧民と融合した。そして、中国へやって来た時、中国式の名前が必要とされた。ユダヤ人は姓が無かったので、中国は彼らの姓を「秦氏」とした。「秦」とは「秦の始皇帝」の「秦」ではない。「大秦」の意味もあろうが、「秦人」で「流浪の民」の意味がある。彼らが、放浪の民だったからである。そして、巨大な中国との対立を避け、朝鮮半島に達した。そこで高句麗を建国。更に南下し、元々あった馬韓に加え、辰（秦）韓、弁韓を建国した。これらは、後にそれぞれ百済、新羅、伽耶になった。しかし、中国の台頭と高句麗の抵抗、そして半島の動乱。これを機に、伽耶に居た騎馬民族が日本海を渡って来日した。

当時、日本は物部氏が支配していた。（実は、物部氏は失われた十支族の内、海のシルクロードを渡ってきた者たちである！彼らは「アロンの杖」を携えていた！）そこへ、「マナの壺」を携えた騎馬民族の大王が婿入りして初代天皇、応神天皇となった！（神武ではない。）応神天皇は何回かに亘って秦氏を呼び寄せた。そして、イエスのカッパーラに従い、今日の日本の基礎となる土台を作り上げた。ユダヤの三種の神器なども封印した。徹底的に封印した。神社は言うまでもなく、民一人一人までも。カッパーラに囲まれているので、いつしか誰もカッパーラをカッパーラとも思わなくなった。漢字、相撲、七五三、門松、御札、家紋 etc（日本の場合、西洋の黒魔術的カバラと違い、イエスが明らかにした正統派カバラなので、原音に近い「カッパーラ」とする。）

さて、日本とは？日本神話とは？皇室とは？天皇とは？神社とは？秦氏と物部氏の詳細は？＜日本の真相＞を、乞う、ご期待！

参考著書：

- ・学研 NSM ブックスエソテリカ宗教書シリーズ、「キリスト教の本 上 下」
- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。

初版：2006 年 8 月

改定 3 版：2009 年 4 月

改定 4 版：2012 年 12 月